

島津久基

物語日本文學

源氏物語 下

至文堂

昭和二十八年四月十五日印刷
昭和二十八年四月二十日發行

物語日本文學

源氏物語下

定價金貳百參拾圓

著者 島津久基

發行者 東京都新宿區拂方町二七
佐藤正叟

印刷者 東京都港區亦坂田町六ノ六
三宅千代松

發行所 東京都新宿區拂方町二七
至文堂

電話九段(33)一四一五番
振替口座東京二九五〇七番

例言

一、本卷には源氏物語五十四帖の中、若菜上卷から夢浮橋卷まで二十一帖を収めた。雲隱卷までは源氏の後半生を叙し、橋姫卷以下は所謂宇治十帖で、薫大將が主人公になつてゐる。匂宮・紅梅・竹河の三帖はその連繫をなす卷々である。

一、執筆の方針その他は凡て上巻と同斷である。

一、附録の略系圖は本卷に現れる主要人物だけを示したものである。

一、本書は共譯者の中、島津久基が擔當した。

昭和二十八年四月

目次

蹴鞠

若菜卷 上……………(源齡三九十二月—四一三月)

若菜卷 下……………(四一三月—四七十二月)

哀しき笛竹

柏木卷……………(四八正月—秋)

横笛卷……………(四九春—秋)

鈴蟲卷……………(五〇夏—八月)

小野の落葉

夕霧卷……………(五〇八月—冬)

紫の煙

御法卷……………(五一春—秋)

幻卷……………(五二正月—十二月)

六

五

元

一

落つる光……………九

(雲隱卷)……………(この間八年)

匂や薰や……………八

匂宮卷……………(薰齡一四—二〇正月)

紅梅卷……………(二四春—冬)

竹河卷……………(二四・五—二三秋)

姉妹の姫……………三

橋姫卷……………(二〇—二二冬)

優婆塞の宮……………一〇

椎本卷……………(二二・二月—二四夏)

解けぬ總角……………二七

總角卷……………(二四八月—十二月)

山莊の春秋……………一四〇

早蕨卷……………(二五卷)

宿木卷……………(二四夏—二六四月)

君がかたしろ……………一七一

東屋卷……………(二六八月—九月)

宇治の川波……………一六七

浮舟卷……………(二七正月—三月)

消ゆる蜻蛉……………一七二

蜻蛉卷……………(二七三月—秋)

尼の小舟……………一七九

手習卷……………(二七三月—二八四月)

文使の童……………一八三

夢浮橋卷……………(二八四月)

附

錄

略系圖

.....

二二

源氏物語 下

蹴鞠

紅葉の錦輝もみぢにしきかがやき渡る六條院の御幸の後、御不例がちにおはしました朱雀院は、いよく御病おんやまひ重おもらせられ、御出家の御志があらせられたが、唯一つ、御年やつと十三四ばかりになられる三の皇女が、山籠りの後は誰を頼みの蔭にと思召しやられると、それが御數きの絆であつた。御見舞の夕霧中納言を御前に、靜かに御想に耽らせられる院の御心に、この君を幼稚い姫宮の後見にでもといふ御考が浮ばぬ事はなかつたが、既に太政大臣の娘雲居雁といふものが定まつてあれば致し方もなかつた。寧ろ、源氏君が紫上を育てたやうに、親代りになつて面倒を見てくれる人に預ける方が、宮の爲にも、亦御自身の御爲にも安心といふものではあるまいか

とも思召おもほしめされるのであつた。螢兵部卿宮ほたるしやうぶきやうのみや、或は御最愛あるひごきあいの臘月夜おぼろつきよのしのかる、尙侍しやうじには義甥をひに當る柏木右衛門督もんのかみも下心したごころのある由よしを聞召きこしめされぬでもないが、皇女みこにふさはしい婿君むこぎみとは御思おもひ定さだめにはなれなかつた。あれこれと思案しあんに昏ぐれさせられてゐる折をりから、東宮とうぐう（朱雀院すざくあんの皇子わうじ）が若し思召おもほしめしがあるなら、いつそ六條院りくじょう（源氏げんじ）にこそ御差おさし上げになつたらと、御勸おすめになつたので、院いんも、御自身ごじしんの御代おんかひりとして皇女みこを心安こころやすく御任おませ出來できる人ひとは、源氏げんじを措おいては他ほかにあるまいと、實じつは早くから御心寄ごころよせのあつたこととて、我が意いを得えたりと、早速御内意さつそくごないいを御傳おつたへ遊あそばされた。源氏げんの固かたい御辭退ごじたいも、切きつなる院いんの御懇望ごのきみには、押切おしきる力ちからはなくて、その女三宮をんなさんのみやの御裳着おんもぎの御祝おまじの濟すんだ年の暮くれ、院いんの御落飾ごらくしあつて後のち、竟つひに御受諾ごじゆたくの旨むねを表明へうめいせられねばならない事ことになつた。院いんの御胸中ごきゆうちゆうも御推察ごすいさつ申まを上げれば御痛おいたはしく、斯かくは御承おうけをば申まをしたものの、長い年月心ながいとしつきこころ一つに守り續つづけた愛あいする紫上むらさきのうへを思おもふと、源氏げんじは心が重おもくならずには居ゐれなかつた。神懸かみかけて變いらぬ契ちぎりは、この新あらたしい姫宮ひめみやの御爲ために、いよく深ふかまればとて露程つゆほども瑕瑾ひびの入はいるものとは思おもはれないのだが、些いさかでも惱なやみを與あたへることが、源氏げんじにとつては何なによりも辛つらい事ことなのだ。降りしきる庭にほの雪ゆきに、淋さびしい目めを落おしながら、深い吐息といきを洩もらした源氏げんじの聲音こゑは、力弱ちからよわく濕しめつてゐた。

「實は昨日院の御見舞に上つたら、前々から時折御内意はあつた女三宮の御上について、御自ら折入つて再復御頼み遊ばされたので、まさかに御目の前でそつけなく御辭退もならず、たうとう御承引だけは申して參つただけどねえ、……私の苦しさ。こんな事口に出すだけでも濟まない。眞實濟まないと思つてゐるのです。ま、いづれは御山籠りの折ぐらゐまで御預り申上げれば、義理は濟むといふことにならうが、……だけど、どのやうな事があらうとも、私の眞情には何の動きもないつて事は信じて貰へる筈です。何にも氣にかけないでね。」
勞はるやうな一言々々を、女君は案外靜かな氣持で、

「ほんに勿體ないお話でございますわねえ。私に濟むの濟まぬの、そんな事がまあ。却つて失禮な奴だと、姫宮様から御咎めがなければよいがと存じて居るくらゐでございますもの。」
降つて湧いたのつびきならぬ出來事に板挟みの源氏の心の中もそれと察して、醜い嫉妬がましい素振りは微塵も外に見せまいと、淋しい悲しい思ひをじつと胸に怵へて、わざと平氣を装うてゐる紫上だつた。

正月二十三日の子の日、今は髯黒左大將の北方と時めく玉鬘尙侍が行装美々しく六條院へ上られた。それは恰も今年四十の春を迎へられる源氏の君の御賀を祝はうとてであつた。その日の晴れの御座は、南の大殿の西の間を、廣々と取り拂つて、綺羅びやかに調へられた。御祝の若菜を捧げて渡られた尙侍の様態に見違へる程落着が出来て、二人の若君を連れた大人びた様子に、源氏は莞爾と微笑まれた。

若葉さす野邊の小松を引連れてもとの岩根を祈る今日かな
 慎しやかな玉鬘の御祝の詞に返して、源氏も、

小松原木の齡にひかれてや野邊の若菜も年を積むべき

「この末遠い幼児達にあやかりたいものだ。」

と御土器を上げられた。これは又、賀の祝などとは凡そ似つかはしくない、何時見ても光るやうな御若さである。太政大臣・左大將始め、今日の慶びに参じたある限りの上達部達も皆座に着き、籠物四十、折櫃物四十、數々の獻上物を捧げた人々の列は、美しい繪卷のやうに續いた。御盃も廻り、若菜の羹に御齡を賀して、御病氣の院への御憚りから、管絃の遊びは極く静か

に、それでも夜更けるまで鳴りは止まなかつた。

それから二十日ばかり経つた二月の十日餘り、いよいよ女三宮の御輿入れの儀式が行はれた。院に對し奉つても、疎略には出來ず、さりとてこの齡になつてと思ふ一方、一人悶を胸に疊んで淋しげな紫上がいとほしく、又恥づかしいやうな氣さへして來るのだつた。

目に近く移れば變る世の中を行末遠く頼みけるかな

女君の亂れ書きを手にとつても、

命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ中の契を

世間並の夫妻中と一つにならうか、比翼連理はおろか、身さへ心さへ切つても切れぬこの契をと、慰める下からほつとつく吐息、溢りきつて出でやらぬ男君を、無理に勧めて三宮の方へ渡らせるのは、反對に女君の方であつた。でもその後の何とも言へぬ堪へ難い淋しさ。忘れようにも忘れられぬあの須磨の御別れ、それでもこんな切ない心持には突き詰めなかつた。いつそあの時、焦れ死に死んでしまつてゐたら。それでは併し今日までの生甲斐のある世はあられよう

か。義理と情の柵はかうも苦しいものと、唇を噛みしめる間の外は一晚中冷い風の音が耳を打つて、合はぬ暇も侍女達に氣づかれはしまいかと、身動きにさへ配る心も寒い曉方、源氏も源氏で、すゝまぬ夜の浅い夢に、紫上の幻を見て氣も漫に、鶯の聲を待ちかねて此方へ御歸りになつた。泪に濡れた袖を引き隠して、穏やかな笑顔を見せて迎へる女君、何から何までこれ程の女が又とあらうかと、昨日よりは今日、今日よりは明日と、益々強く源氏は心を牽きつけられずには居れない奥深い紫上であつた。

同じ頃、桐壺の御方（明石姫。東宮妃）も御懷胎の爲、六條院に御退出になつたので、御見舞旁々紫上が御前へ上つたついでに、その御隣室の女三宮にも御目にかゝりたいと言ひ出したのを、

「それはもう願つたり叶つたりだ。まだほんの子供と申上げてもよいのですから、何かと教へて上げて下さう。」

と源氏も殊の外喜ばれた。若やかに優しい紫上の心遣ひに、幼い姫宮は直ぐに馴染んで、それから何かにつけ、和やかな睦まじい御交りが結ばれたのであつた。

紅葉も霜に色づく神無月、源氏四十の賀を壽く薬師佛の供養が、嵯峨の御堂に、紫上の心盡しによつて行はれた。目も綾な調度は山の錦に照り榮えて、一段と光を増した。續いて秋好中宮の御祝を受けられ、夕霧も冷泉帝の勅命を受けて、いやが上にも榮ある賀が祝福された。今日明日と待たれた桐壺の御方、御産も、年が明けて櫻咲く頃めでたく済んで、殊には男御子と申す事とて、源氏の歡喜はもとより、紫上も自分の子でもあるやうに、殆ど抱きつきりといふ有様である。遙か朝霧を隔てた明石の浦でも、この吉報を傳へ聞いて目を細くした曾祖父の入道は、これでもう思ひ残す事なしに浮世を離れる事が出来ると、いよくかねて思ひ定めた深い山に隠れようとの決心を固めて、これまで住吉の社に籠めた數々の願文を封じ入れた沈の箱に添へて、最後の手紙を京へ書き送つた。

「長の年月、同じ世に生き存へながら、御消息も絶えて久しく致さぬが、つてに承ればこの度若宮御誕生の由、俺に取つても、まことに本望の至りと、深く御慶びを中上げたい」と申すは、今更この朽山伏の榮華を望むでなし、年頃朝夕に自らの蓮の上の願ひをばさて置い

て、そこ許の上のみ祈り續けて來た念ひが叶うた嬉しさで一杯なのです。そなたが生れた年の二月、或夜の夢に、俺が須彌の山を右手に捧げてゐると、山の左右から月日の光がさやかに射して世を照すと見えたが、自身は山の下に隠れてその光には當らず、そのまゝ山を廣い海に浮べておいて、小舟を出して西の方指して漕ぎ去ると見て目が醒めたが、幸先強いそなたのこの運を信じたればこそ、力及ばぬ身も願みず、高い望も懸けたのであつた。思ひの通りの時に逢つて、やがて姫宮が國母と仰がれ給ふ。曉には、必ず佳吉の神に御願果しをしてくれますやうに。今は心安く九品淨土の御佛の來迎を待たうが爲、閑な山へ入らうと思ふにつけて、この事を一筆書き遺します。

光出でむ 曉 近くなりにはけり今ぞ見し世の夢語りする」

これを限りに入道は人跡も稀な奥山を分けて、命を懸けた勤行にと出で立つた。遠く西の空に夫を、そして父を思ひ遣る、尼君と明石上の歎きもさこそと思ひ遣られる。

文箱を携へて、娘の明石御息所の室に行つた明石上が、その手紙を擴げて、入道の事、身の行末の事など細々と物語つてゐる所へ、

「若宮はお目ざめになつたかな。」

と入つて來られたのは源氏君。皇子は相變らず紫上の懷に抱かれて此方には御在でない。
ふとその箱に目を留めて、

「何だか怪しい箱だね。戀の長歌でも入つてゐさうな。」

笑つて戲談を仰しやる君を見遣つて、抑へるやうに、

「まあいやでございますわ、飛んでもない御戲談を。いえこれは明石の岩屋から參りました願文でございます。折がございましたら御目にもかけようと存じて居りましたんですけれど」と答へる明石。急に君もしんみりとなつて、

「ほんになあ。世の濁りに染まず、行ひ澄まして居られる事だらう。」

斷ち切れない煩惱に苦しむ我が心がふつと淋しくなつた。手紙の文字を追うて行く源氏の眼は、不思議な夢語りの所ではたと止まつた。だからこそあのやうに強ひても娘を頼み入れたのだつたか。罪なき罪に漂ひ歩いたのもこの姫君一人の爲だつたのだと、今更に深い因縁といふものをはつきりと悟つて、無量の感慨に打たれるのであつた。